



TITLE:

# <學界展望>フランスにおけるイラン學・トルコ學の現状

AUTHOR(S):

羽田, 正

---

CITATION:

羽田, 正. <學界展望>フランスにおけるイラン學・トルコ學の現状. 東洋史研究 1984, 42(4): 733-739

ISSUE DATE:

1984-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153922>

RIGHT:

## 學界展望

### フランスにおける

### イラン學・トルコ學の現状

羽田 正

一七九五年の東洋語學校 *Ecole spéciale des langues orientales vivantes* 設立、そして一八二二年のアジア協會 *Société asiatique* 創設以來二百年近い傳統を誇るフランス東洋學は、その研究の獨創性、多様性、陣容の豊富さで今日もなお世界の東洋學界に屹立している。

筆者は一九八〇年十一月から一九八三年七月まで約二年八箇月間フランス政府給費留學生としてパリに留學する機會を得た。トルコ學の分野では濱田正美、森安孝夫兩先輩が同様の資格で既に滯佛されたことがあったが、イラン學關係では日本人としておそらく筆者が初めてであろうと思う。何人かの教授の名を知るのみで全く事情の分からない彼地の學界を想い、出發前は相當不安であつたことを覚えてゐる。幸いパリでは現地の東洋學者達の暖かい歡迎を受け、快適に勉學に勵むことが出來た。歸國後、編輯委員會よりフランス學界の近況報告を書かないかとの誘いがあり、向後彼地へ研究に赴かれる方々、又フランス學界に興味をお持ちの方々の御参考になるものならと御引受けすることにした。小文がこれらの方々のお役に少しでも立てば幸いである。ただ最初にお断わりしておかねばな

らないのは、これはあくまでも筆者一個人の目に觸れたフランス學界事情に過ぎないということである。また本來東洋學全般について報告せねばならないところ、筆者の能力不足から極めて限られた分野についてだけの報告となつてしまったことも豫めお詫び申し上げておきたい。

#### I

まず、フランスにおけるイラン學・トルコ學教育の現状について報告する。一九六八年に始まる學制改革により從來の學部制が解體され、各研究部門が新しく幾つかの大學に再編成されたことは周知の如くである。パリについて言えば、同じ歴史系でも、中國史はパリ第七大學、イスラム史はパリ第六大學、フランス史はパリ第一・四・七・八・十・十三大學で講じられ、これに大學とは別組織のコレージュ・ド・フランス *Collège de France* 高等研究學院 *Ecole pratique des hautes études* などの講義が加わるため、日本の大學の學部制に慣れたものにとっては複雑極まりない。

ここで問題にするイラン學・トルコ學關係の講座も例外ではない。パリに限って言うと、パリ第三大學、高等研究學院（以下 *EPHE* と略）社會科學高等研究學院 *Ecole des hautes études en sciences sociales* それに通稱ラングソと呼ばれる舊東洋語學校（正式名、國立東洋言語文明研究所 *Institut national des langues et civilisations orientales*）が主たる教育機關である。そしてこれらを統合する形でパリ第三大學にイラン學研究所 *Institut d'études iraniennes*（所長ジルベール・ラザール *Gilbert Lazard*）トルコ學研究所 *Institut d'études turques*（所長ルイ・バザン *Louis Bazin*）が

組織されている。この二つの研究所は當該研究のあらゆる分野を専攻する研究者や學生の便を計るためかなり充實した圖書室を持ち、同時に各大學や研究所で分散して行なわれている講義を統括、運営し、各種の情報を提供している。學生、教職員が上記のどの機關に所屬しているかと必然的にこの研究所のメンバーとなるわけでありその意味でこの二つの研究所がフランスにおけるイラン學、トルコ學の中心であると言えよう。

なお全國的に見ると、イラン學關係はバリのみ、トルコ學關係はバリ以外に、ストラスブル第二大學、エクス・マルセイユ第一大學にそれぞれ講座がある。(但しストラスブルでは講座の形はとらないが、ベルシア語が教えられていると聞く。)

さてバリにある諸機關のうちラングゾはその舊稱の通り東洋諸國語教育の専門學校で、西はスラブ諸語から東は朝鮮語、日本語に至るまで東洋諸地域の殆んどすべての言語が教授されている。重點は今日の生きた言葉の習得に置かれており、その結果トルコ語科においては共和國トルコ語が主に教授され、學年が進むとオスマン語への入門講義もある。ベルシア語學科も同様で講義の大半は今日の新聞や文學作品の講讀に充てられている。従つて、學生は普通まずこのラングゾで一般教養と並行してかなり厳しい言語訓練をうけ、その後更に先へ進みたい者がその他の研究、教育機關に登録することになる。

イラン學研究所、トルコ學研究所の運営する講義はすべて、基礎課程 enseignemens de base、完成課程 enseignemens de perfectionnement、研究課程 enseignemens de recherche の三種に分たれ、それぞれがおよそ日本の教養課程、學部課程、大學院課程

に相當する。今手元にイラン學研究所八二年度の研究課程講義の要綱があるので次に抜書きしてみる。

# 一、ベルシア語と文學(ラングゾ)

。ベルシア文學と思想史の諸問題

。翻譯方法論

教官 A. G. Rawan Farhadi, H. Milani

# 二、言語學 (EPHE 第四セクション)

。イラン・フーリア言語學の諸問題、テキストの研究、言語の

分析

教官 G. Lazard, P. Gignoux, C. Herrschmidt, R. Gyselen

# 三、哲學と宗教 (EPHE 第五セクション)

。古代イランの宗教

。マニ教

。イスラム教

教官 P. Gignoux, D. Gimaret, G. Monnot, M. Tardieu

# 四、古代史と考古學

。中央アジア、イラン、近東考古學の諸問題

教官 J. M. Dauter, J. C. Gardin

(以上バリ第一大學考古學研究所)

。ヘレニズムとイラン世界、考古學、歴史學の諸問題

教官 M. P. Bernard

(以上 EPHE 第四セクション)

。エラム語と碑銘學

教官 F. Grilhot

(以上ルーヴル校 Ecole du Louvre)



## 3、比較史イスラム・東方研究センター

Centre d'études islamiques et orientales d'histoire comparée

責任者 J. Aubin

## 4、ササン朝イラン史 Histoire de l'Iran sassanide 責任者

P. Gignoux

第一エキップは主として民族學的手法による現代イラン研究をその目的とし、責任者のディガール CNRS 助教授は最近 *Techniques des nomades baryāri d'Iran*, Paris et Cambridge 1982 を公刊した。イラン人研究者も参加し、現地でのフィールドワークも盛んに行なわれている。

第二エキップは、イラン言語學の大家ラザール EPHÉ 教授を中心とし、主に言語學に關心を抱くメンバーから構成されている。ラザール教授は十年來ベルシア語—フランス語辭典の編纂に取組んでおり、ここ一二年のうちに刊行の運びとなることとであった。この辭典が完成すれば、以後のイラン研究に資すること甚だ大であらう。

第三、第四エキップはそれぞれイスラム以後と以前のイラン史を研究対象とする。このうち第四エキップは貨幣・碑銘などからササン朝の歴史を考えるジニュー EPHÉ 教授が中心人物である。第三のオバン・エキップは筆者が屬し、その活動状況が些かなりと把握できたので、ここでやや詳しく紹介してみる。

このエキップは本來イスラム時代イラン史をその研究領域とするが、オバン教授の問題關心が十六世紀以後のヨーロッパと中近東關係史に擴がるにつれてその方面の研究者も参加し、現在十五人の構成員が三つの分科會を形成している。

## 第一部會 中世イラン史

J. Calmard (責任者) C. Adle, S. Melikian-Chirvani, A. A.

Mossadegh, M. Haneda

## 第二部會 インド洋史

G. Bouchon (責任者) J. M. Gardin, D. Poiche

## 第三部會 ヨーロッパの擴大とイスラム世界

M. Lesure (責任者) A. Kirell, C. de la Veronne, B.

Simon, L. P. Thomaz

これら三部會全體をオバン教授が統轄しているわけである。分科會は、第二、第三部會ではしばしば開かれ、メンバーが順に研究發表を行なつて活潑な討論が展開される。また全體會合が年二—三回持たれ、その席で各自が目下の研究の進捗状況とその見通しを述べ、エキップ全體の問題などが話し合われる。話はやや横道にそれるが、この席では翌年出張の必要があるものはその旨申し出、オバン教授の許可を求める。國際關係史を主題とするエキップだけに出張の希望は多く、決して潤澤とは言えない資金をどう割り振るか、教授はいつも頭を悩ませていた。しかし、このことは逆に言うところ、エキップの資金は一般にすべて責任者の掌中にあることになるわけで、エキップのメンバー選擇權を責任者が完全に握っていることとあわせ、フランス學界のボス教授の權力が極めて強いことの理由の一端を垣間見る思いがした。

オバン・エキップは數年前まで定期刊行物として *Le monde iranien et l'Islam*, *Mare Luso-Indicum* の二點を持っていたが、財政の惡化で目下一時休刊のやむなきに至っている。

メンバーは、勿論各自が独自に研究を行なっているが、全體とし

てみると、十六—十八世紀史に關心を寄せるものが最も多く（トランスではサンファウィー朝時代、東西交渉史ではメルナガルの覇權時代から、オランダ、イギリス、フランスの進出まで）、今後この分野での成果が大いに期待される。主たる研究者のこれまでの代表的業績を次に掲げる。それにより各人の興味の方向を知ることが出来るであろう。

J. Aubin, *Deux sayyids de Bam au XV<sup>e</sup> siècle. Contribution à l'histoire de l'Iran timouride*, Wiesbaden 1956  
id., *L'ambassade de Gregorio Pereira Fidalgo à la cour de Chah Soléin-Hosseyn 1696—1697*, Lisbonne 1971

id., *Le royaume d'Ormuz au début du XVI<sup>e</sup> siècle. Marre Luso-indicum*, II, 1973

J. Calmard, (CNRS 助教授), *Le culte de l'Imam Hussein. Etude sur la commémoration du drame de Kerbala dans l'Iran présafavide*, Paris 1975 (ペリ第三大學への學位請求論文)

C. Adle (CNRS 助教授), *Siyāqi Neẓām, Forūhāt-e Homājun, "Les victoires angustes"*, 1007 / 1598, Paris 1976 (ペリ第三大學への學位請求論文)

A. S. Melikian-Chirvani (CNRS 教授), *L'argenterie et le bronze iraniens (VII<sup>e</sup>-XI<sup>e</sup> siècles). Essai sur la naissance et l'évolution de l'art de l'Iran islamique*, Paris 1972 (ペリ第一大學への學位請求論文)

id., *Islamic metalwork from the Iranian world, 8th-18th centuries*, London 1982

G. Bouchon (CNRS 助教授), *Navires et cargaisons retour de l'Inde en 1518*, Paris 1976

M. Lesure (EPHE 助教授), *Lépante. La crise de l'Empire Ottoman*, Paris 1972

A. Kroll (CNRS 職員 Collaboratrice technique), *Nouvelles d'Ispahan 1665—1695*, Paris 1979

トルコ學關係のエキャンは次の四つである。

1. トルコ學研究所 Institut d'études turques 責任者 L. Bazin

2. トルコ語文書とトルコ文書と東ヨーロッパ史 Histoire de l'Empire Ottoman et de l'Europe orientale d'après les fonds d'archives turcs 責任者 A. Bennigsen

3. 近東研究センター Groupe de recherches et d'études sur le Proche-Orient 責任者 R. Mantran

4. 子供と成人における言語の相違による心理的混亂研究グループ 責任者 Tabouret-Keller

第一のハン・エキャンは、イスラム以前、従って北アジア、中央アジアのトルコ語テキストの歴史學的、言語學的検討と近現代トルコ世界の民族學、社會學的考察を二つの大きな研究テーマとしている。ハンゼン教授の包容力ある人柄を反映して多數のトルコ學者がこのエキャンに参加しているが、そのうちでも、ウイグル語テキスト研究の第一人者 J. Hamilton CNRS 教授、口承傳承、民俗研究の大家 P. Boratav CNRS 教授、中央アジアトルコ民族の宗教的傳統を研究する J.-P. Roux CNRS 教授、バーブル・ナーメ研究からトルコ學の道に入り、今日では十六世紀初頭のオスマン帝國とサンファウィー朝關係史、更にオスマン帝國のエジプト支配に關心を

寄せる J.-L. Baqué-Grammont CNRS 助教授、アフガニスタンバミールのキルギズ族の言語、傳統が専門の R. Dor CNRS 講師、出生に關するアナトリアの民間信仰を民俗學的に研究し、今日トルコ語の動植物名に興味を持つ M. Nicolas CNRS 職員などが有名である。

第二エキップは、主にイスタンブルに現存するトルコ語文書を用いて、十七—十八世紀のオスマン帝國領ダニュープ流域地方、更に十六世紀以後の歴史を研究するグループである。主な研究者としては、既に舉げた J.-L. Baqué-Grammont を別として、A. Benning sen EHSS 教授 C. Lemeret-Quejday それに夫妻で共同してオスマン朝初期の法制に取り組む N. et I. Beldiceanu オスマン帝國の王子ジェムを通して十五世紀末の西歐—オスマン關係に新たな光をあてる學位論文を最近完成した若手の N. Vatin などがいる。

南佛のニクス・アン・プロヴァンスに本據を置く第三の近東研究エキップは、十六—十九世紀オスマン帝國治下のアラブ諸州（主にシリアとエジプト）を研究対象とし、アラブに傳統的な行政、宗教、社會制度が、オスマン帝國の支配によりどのように變化して行ったのかを考察しようとする。責任者のマントランには、博士論文の主要部分を出版した *Istanbul dans la seconde moitié du XVII<sup>e</sup> siècle. Essai d'histoire institutionnelle, économique et sociale*, Paris 1962 をはじめ數多くの著作がある。

最後の第四エキップは東佛ストラスブルにある。二重言語が人間に與える様々な影響を考察することがこのエキップの研究目的で、トルコ語、ペルシア語の二言語が使用されているイラン西北部アゼルバイジャン地方を例にとって調査が進められている。このエ

キップに直接の關係はないが、ストラスブルには、アナトリアの宗教文學を研究し、この地方に住むトルコ族の異端的宗教に關して注目すべき發言を行なっている I. Melikoff がいる。

以上フランスにおけるイラン學、トルコ學の研究状況を略述してきたが、これらを總合してみると、フランス學界にもやはり研究者の層が厚く今後大いに發展が見込まれる分野と、どちらかと言えば手薄な分野があることが分かる。

イラン學について言うなら、P. Gignoux, G. Lazard を中心とした古代から近代に至るまでのペルシア語の言語學的研究、オバン・エキップとトルコ學者の相互協力の上に立つ十六世紀大航海時代以降の中近東とヨーロッパの關係を扱う文獻史學がさしずめ “point fort” ということになる。これに對して “point faible” として、*Corbin* H. Corbin 死後後繼者のいない思想史、それにペルシア文學がある。

トルコ學の分野では、L. Bazin, J. Hamilton, J.-P. Roux を中心とするイスラム以前のトルコ世界、二つのエキップの研究対象である十四—十八世紀オスマン帝國史、P. Boratav, I. Melikoff に見られる口承文學、宗教文學研究が最も盛んで業績にも見るべきものが多いのに對して、美術史、考古學、現代トルコ社會、オスマン語文學の分野の研究には目立ったものがないように思える。

### III

フランスのイラン學、トルコ學を語る際に缺かすことが出来ないのが充實した在外研究施設存在である。テヘランには、フランス・イラン兩國間の外交關係惡化にもかかわらず堅實に研究活動

續けるフランス・イラン學研究所 Institut Français d'Iranologie de Téhéran がありイスタンブールには傳統を誇るフランス・アナトリアン學研究所 Institut Français d'Etudes Anatóliennes d'Istanbul がある。これらの研究所には數人の専任研究員があり、常時現地の學者と連絡を取りながら資料の収集、各自の研究に攜わっている。また宿泊設備が完備され、本國からの研究者の便に供されている。我國のこの種の施設の現状を見るにつけ、實に恵まれた環境であると言わざるを得ない。

イラン學 Iranologie、トルコ學 Turcologie が傳統的な東洋學 Orientalisme から獨立し、一個の學問として成立するのは、第二次大戰後のことである。フランスにおいても研究の深化に伴い専門の細分化現象が進んできた結果であると言えよう。さうして一九六〇年代末から七〇年代はじめにかけて Association pour le développement des études turques (イラン學發展協會) Association pour l'avancement des études iraniennes (トルコ學發展協會) が創設される。この兩協會はその名の通り、フランスのイラン學者、イラン學者が協力してそれぞれの學問分野の發展に寄與することを目的とし、機關誌として *Turcica*, *Studia Iranica* を持つ。雙方ともに高度な内容の學術誌で、彼國における研究動向を知る上で欠かせないものである。最近では *Turcica* 編集部は *Collection Turcica* と銘打ち特集シリーズ (第一巻 *La Turquie et la France à l'époque d'Atatürk* 第二巻 *Travaux et recherches en Turquie 1982*) を發行し、それぞれこれをモノグラフ出版に活用する計畫である。また *Studia Iranica* は一九七八年より *Abstracta Iranica* とし、世界のイラン學關係出版物の紹介、批評

を目的とする便利な別冊が附録としてつくようになった。ともに今後學界のインシアティブをとって行こうとする兩協會の有益な試みとして評價に値しよう。

フランス人が英語で學會發表を行なうようになってきたとはいえ、フランス學界の重みは變わらず、我國の若いイラン學、トルコ學がそこから學ぶことはまだまだ多い。

最後に、フランス學界の動向をより詳しく知るために便利な何冊かの文獻を舉げておこう。

*Dix ans de recherche universitaire française sur le monde arabe et islamique*, Paris 1982

*Cinquante ans d'Orientalisme en France (1922-1972)*, numéro spécial du *Journal asiatique*, tome CCLXI (année 1973)

L. Bazin "Les activités turcologiques en France," *Turcica*, II, 1970, pp. 159-164.

J.-L. Bacqué-Grammont, "Bibliographie de travaux turcologiques français," *Turcica*, VII, 1975, pp. 264-303.

R. Mentré, "Les études turques en France," *Collection Turcica*, II, *Travaux et recherches en Turquie 1982*, 1983, pp. 15-22.